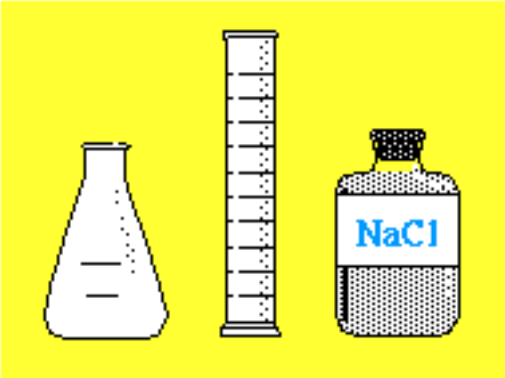

血液とデシリットルはどんな関係？

１デシリットル（dl）は、１リットルの十分の一、つまり0.1リットルである。生化学の教科書や実験書ではめったにお目にかからない、容量の単位だ。生化学では、１リットルの千分の一（ミリリットル）か、百万分の一（マイクロリットル）が主流である。ところが、医学関係で、例えば血液の成分を分析する試薬のマニュアルを読むと、血液１dl（100ml）あたりという記述に出会う。なぜ血液ではdlが、慣用的な単位になるのか。たぶん輸血用血液を採取したり、その血液を取り扱ったりするには、dlが手頃なのだろう。医学のトレーニングを受けていないので、定かでない。

お料理のマニュアルで使われる容量単位は、mlかccである。量が多くなると、カップとかコップ何杯で代用することもある。それにしてもccは不思議な単位で、なぜこれが生き残っているのだろう。かねて何の略語か気になっていたので、調べてみると、cc = cubic centimeter（立方センチ）であった。